

## “がん”に強いナースを育てる！

(文責：看護部 秋山智弥(看護部長), 松野友美(副看護部長))

京大病院看護部では、2007年のがんセンター立ち上げ以来、がん強いナースを育てるための様々な取り組みを実施してきました。本稿では、これまでに看護部が実施してきた取り組みの概要と経過について紹介いたします。

### 1. がん看護スペシャリストの育成

日本看護協会の専門看護師認定制度は、1996年に“がん看護”、“精神看護”の2つの領域で開始されていましたが、当院では2007年まで専門看護師の資格を持つ職員は不在でした。そこで、2007年に専門看護師の獲得に乗り出し、2008年4月、兵庫県立がんセンターから専門看護師1名を迎え入れることができました。その後、兵庫県立大学、神戸市看護大学などから、がん看護専門看護師を養成する大学院修士課程の臨床実習を積極的に誘致し、2009年には当院で実習を終えた1名が、また2010年には同じく当院で実習を終えた1名が就職し、現在、3名のがん看護専門看護師がそれぞれのサブスペシャリティの領域で活躍しています。

一方、認定看護師の資格認定は、1997年に“救急看護”、“創傷・オストミー・失禁(WOC)看護”の2つの領域で開始されており、当院でも2007年時点で11名の認定看護師が活躍していました。がん看護関連領域では、米国MDアンダーソンがんセンターでWOCナースの資格認定を受けて帰国した1名がストーマ外来をはじめチーム医療の礎を築いてきたほか、2名のがん化学療法看護認定看護師が外来化学療法室の立ち上げと運営に携わってきました。

2007年、がん看護関連領域の認定看護師の層をさらに厚くするため、2009年には緩和ケア1名、がん性疼痛看護1名、がん放射線療法看護1名、摂食嚥下障害看護1名、皮膚・排泄ケア1名、がん化学療法看護1名を各教育課程に就学させ、認定看護師の拡大を推進してきました。現在、当院ではがん看護を含む全領域で、計4名の専門看護師と計21名の認定看護師が活躍しています。

### 2. ジェネラリストのための“がん看護”教育

看護部では2007年以降、“がん看護”スペシャリストの育成とともに、ジェネラリストを対象とした“がん看護”教育プログラムの拡充にも努めてきました。

#### (1) “がん看護”レベルアップ研修

卒後4年目以降の看護師を対象とした“がん看護”レベルアップ研修では、①緩和ケア、②化学療法看護、③放射線看護の3つのコースを設定しています。この研修の目的は、がん患者に対する看護ケアの質の向上であり、ジェネラリストナースの臨床実践能力を養い、院内のがん看護の均てん化を図ることを目指しています。

各コースの専門科目のほかに、共通科目として「がん看護総論」「診断場面の看護」など

があり、研修後に事例をまとめ、レポートの提出を課題としています。現在までの修了者数は、2008年度が18名、2009年度20名、2010年度18名、2011年度13名、2012年度12名の計81名にのぼります。

また、“がん看護”レベルアップ研修カリキュラム中の講義については、がん診療連携拠点病院における研修事業としても位置付け、公開講座として京都府下の他施設からの看護師の参加も積極的に受け入れてきました。

## (2) “がん看護”院内認定エキスパート研修

“がん看護”レベルアップ研修修了者を対象とした“がん看護”院内認定エキスパート研修では、緩和ケアとがん化学療法の2つのコースを設定しています。この研修の目的は、当院における緩和ケアと化学療法看護の現状を理解し、高度な知識や技術を習得することです。

緩和ケアは、「疼痛マネジメントと看護援助」「疼痛以外の身体症状のマネジメントと看護援助」「精神症状のマネジメントと看護援助」について、がん化学療法は、「抗がん剤の特徴を理解した安全な投薬管理」「治療目的別の身体的・精神的症状マネジメントと看護援助」「患者セルフケア支援」について、それぞれ講義と演習を行っています。

“がん看護”以外のエキスパート研修との共通科目としては、「看護倫理」「リーダーシップ」「情報処理」「文献検索」「教育・指導方法(スタッフ教育・コーチング)」「コンサルテーション」「インサービス」に関する講義・演習を履修します。

研修後には、病棟で関わっている緩和ケア及び化学療法の患者の事例展開を行い、レポートの提出を課題としています。これまでの“がん看護”院内認定エキスパートの認定者数は、2009年度に2名、2010年度に2名の計4名にのぼります。

## (3) 米国 MD アンダーソンがんセンターへの海外研修

2009年以降、姉妹病院であるMDアンダーソンがんセンターに継続的に研修生を送り出しています。2011年度は、がん看護専門看護師1名とがん放射線療法看護認定看護師1名が研修に参加しました。

### 【専門看護師の学び】角 裕子(積貞棟8階・がん看護専門看護師)

MDアンダーソンがんセンターにおけるチーム医療の実際を見学し感じたことは、リソースが非常に充実しており、それぞれの職種の専門性が明確であることです。看護師の主な役割は、投薬などメディカル面の管理であり、精神的な支援が必要な場合や社会資源の情報提供など、患者が必要としているリソースに繋ぐという調整役としての役割が非常に大きいと感じました。

米国では、LPN(准看護師)がバイタルサインの測定や日常援助を行っており、RN(看護師)は薬剤管理を主な業務とするなど、役割については日本との違いに驚くこともありました。文化的背景や医療システムの違いを鑑み、看護の役割について改めて考える良い機

会となりました。

また、日本には存在しない APN(高度実践看護師)の活動の実際を知ることで、彼らの役割や彼らの存在によってもたらされる患者や家族、医療スタッフへのメリットについて考察を深めることができました。診療場面においては、医師と APN は同じ行為を行っていますが、APN は患者に現在の状況を詳しく説明しながら診察を行っており、患者自らが副作用のマネジメントができるよう教育的な関わりを持っていました。

その他、サバイバーとして生きていく中で生じるストレス(家事や仕事など)やセクシャリティの問題などにも配慮しながら継続的に患者を支援しており、このような点に看護の卓越した専門性が発揮されていると感じました。

MD アンダーソンがんセンターでは、多職種間のコミュニケーションが良好に行われており、そこにはお互いの専門性を尊重した姿勢が伺えました。今後は、今回の研修での学びを活かし、真のチーム医療が提供されるために必要なことを考えていきたいと思えます。

角 裕子(積貞棟8階・がん看護専門看護師)

#### 【認定看護師の学び】浅田 裕美(放射線部・がん放射線療法看護認定看護師)

MD アンダーソンがんセンターでは、各職種の役割が細分化されており、看護師の業務も専門的な内容に特化していました。日本はスタッフ数も少ないため、完全に同じようにすることは困難ですが、患者に必要な情報・ケアの方法を確認することが出来ました。

その他、習慣や文化などの環境の違いはありますが、医療者が患者と関わる際に日本と比べてリラックスできる空間が提供されている印象がありました。スタッフは部屋に入ると患者を笑顔で出迎えて声掛けを行います。診察時も医師や看護師と患者との距離が近く、患者から医療者に対して質問をしている場面が多く見られました。日本では、患者自身が治療を選択するというより、医療者に任せてしまう状況が多いのですが、患者自身が疑問に思うことを口に出して伝えることができる環境は重要であり、そういった環境をつくる必要があります。

今回の研修で学んだことを活かし、今後は①治療開始前の患者が放射線治療に対してイメージしやすく安心して治療に向き合えるよう、治療の流れや治療部位別の情報資料の見直しと作成を行う、②患者や家族と関わる場面において、リラックスして話すことができる環境を提供し、納得して治療が受けられるような関係作りをチームで心掛けていくことに取り組んでいきたいと思えます。

浅田 裕美(放射線部・がん放射線療法看護認定看護師)

### 3. がん看護の質向上プロジェクト始動

2010年より、がん看護スペシャリストを軸にプロジェクトを設置し、がん看護の質の向上に向け、以下の取り組みを立案し、実行しています。

- 患者用パンフレットの作成
  - がんと心

- 緩和ケア
- がん性疼痛
- スキンケア(化学療法・放射線療法)
- 放射線療法クリティカルパス(乳腺・頭頸部・前立腺)
- 化学療法
- 各パンフレットの説明会や効果的に使用するためのロールプレイ研修の開催
- 各パンフレットを活用するための看護師教育プログラムの開発
- がん看護の質評価の方法に関する検討